

法華寺・徳治二年銘《菜桶》（個人蔵）について

―根来塗研究の基礎として―

菊地泰子

はじめに

令和元年秋、大阪市立美術館コレクション展の一つとして「うるわし漆碗 朱・黒」を開催した。同展の準備にあたり、館蔵・寄託品を調査する過程で生じた「根来塗とは何か？」という筆者の問題意識に本稿は端を発する。調査対象作品のうち、個人蔵の菜桶「カラ一口絵3」は、これまでも当館で展示されてきており、いわゆる根来塗として解説されてきた¹。本品と同じく「法華寺」「徳治二年」銘を有する類品は三件知られている。このうち一件は文化庁蔵の重要文化財《根来塗菜桶》であり、ほかに京都・細見美術館蔵の重要美術品《菜桶》、個人蔵《菜桶》がある。いずれも根来塗を語るうえで欠くことのできない存在となっている。

一般に根来塗または根来と称されるものは、堅牢な下地をほどこした木胎に黒漆の中塗りとして、朱漆を上塗りしてできた朱漆塗の漆器（朱漆器とも）をさす²。かつて中世大寺院の一つであった根来寺（現在の和歌山県岩出市）一山内で良質の朱漆器が生産されてきたため、この名がついたという³。今では「根来に根来無し」の譬⁴

えがあるように、寺院内で製作されたことを確認できる伝来の確かな「根来塗」は、底裏に「細工根来寺重宗⁵」の朱漆銘がある、茨城・六地藏寺の布薩盥（重要文化財）を除いてほかにない。同寺は関東における真言宗の本山としての資格をもつ。一方、根来寺は新義真言宗の総本山であり、同寺の工人が製作したことの明らかな「根来塗」、その成立時期や生産体制、宗派を超えた流通経路等は詳らかでないことが多く、検討の余地を残している。現状、根来寺で生産されたといわれる朱漆器が五指に満たない中で、「根来塗」の特色を述べることも叶わない。

また黒漆の地に朱漆をほどこした朱漆器は、中世に限らず、かつ根来寺以外でも作られてきており、発掘調査で出土した漆器のうち飲食器具や仏具、神饌具等にもよくみられる⁶。一見して同様の技法を用いる作例は銘の有無や出来栄えの優劣に関わらず、非常に多く存していることから、朱漆器をして一概に「根来塗」とするには確たる証拠たり得ず、何をもって「根来塗」とみなすかという定義付けをも難しくしている⁷。そこで今一度、根来塗を代名詞とする朱漆器全般に立ち返り、このうち伝来や所在、銘の判明しているものを

中心にとりあげ、根来塗の片鱗を探ることにしよう。

本稿で紹介する個人蔵の菜桶もまた一連の朱漆器に含まれるもので、底裏に銘文が記される。研究誌上では具に論じられてこなかったとはいえ、当館ではその資料性の高さに注目していた。ところが、開催期間が限られていたためか、展示そのものが人口に膾炙されてこなかったようである。展示を終えた今、先の調査で得られた成果を元に、類品等との比較を交えながら、本菜桶の構造や材質技法を中心に述べることで、広く江湖の叱正を賜るとともに今後の根来塗研究の手掛かりとしたい。

一、作品の概要

ここでは菜桶の高い資料性を鑑み、これまでの調査で得た作品画像の掲載と菜桶に関する作品詳述を行う。

《菜桶》 一口 個人蔵 【カラー口絵3・4】

鎌倉時代・徳治二年（一二〇七）

木胎漆塗

底裏朱漆銘「菜桶廿四□□□□／法華寺常住／徳治二年□□□□」

胴径…三三・二 総高…二五・七（cm）

木製円筒形、胴部上下に箍をめぐらせて、提げ手をもうけた容器。総体黒漆塗の地としたうえに、箍の上下と提げ手の面取部分とにそれぞれ朱漆塗をほどこす。全体的に漆の表面には細かい断文が走り【図1～4】、時代性を物語る。底裏は漆の剥落にともない朱漆銘の判読できない箇所があるが、「法華寺」「徳治二年」の銘文が読み取

れる【図5】。朱漆銘によれば、この種を「菜桶」と称することがわかる【図6】。菜桶とは、寺院で食材を入れて持ち運ぶ、給仕用の手桶という⁽⁸⁾。飲食器具として用いられた朱漆器は、京都・西本願寺蔵「慕婦絵詞」、文化庁や東京・静嘉堂文庫美術館蔵「酒飯論絵巻」とその模本・版本等によく求められる。ほかに京都・大徳寺蔵「五百羅漢図」では、僧侶の食事に際して給仕用の飲食器具を運び込む行者たちの姿が描かれる。一人の行者の右手に、菜桶に似た容器が提がっているほか、飯台の真下にもこれとよく似た容器が置かれる。これらの桶は菜桶と判断されており、寺院の給仕に使用していたのだろうという指摘がある⁽⁹⁾。本品も例に漏れず、給仕の用途で使われていたのだろう。底裏は打痕がところどころ見受けられ、漆が剥落している【図5】。日常的に供していたものと考えられる。

本品の提げ手は雲形の曲線を描き、その付け根に鋏形状の割り込みをほどこす。わが国に将来された唐物の影響が看取される。雲形の提げ手は多少かたちを変えながらも、現存する湯桶⁽¹⁰⁾によくみられる。本品にもともと蓋がついていたかどうか、来歴や由緒に関する資料や附属品が見当たらず、定かではない。菜桶には蓋をとまなう遺例⁽¹⁰⁾が僅かにあり、蓋なしと二種類あったかという指摘がある⁽¹¹⁾。改めて本品をみると、蓋をもうけていた可能性がある。提げ手付け根の外側は黒く、艶を感じさせるのに対して、内側は茶色く枯れ、若干摩耗してやわらかい印象を宿しており、黒漆の色味や艶に差のあることがわかる【カラー口絵5】。また付け根上方の提げ手から鋏形状の割り込みにかけて、付け根外側と同様に黒く艶やかである。勿論、提げ手には手擦れが生じており、朱漆がかすれているが、

下層にみる黒漆は艶や透明感を放つ【カラー口絵3・図7】。一方、付け根内側は透明感や艶を失い、提げ手や付け根外側の黒漆とは異なる様相を呈する【カラー口絵5】。つまり、付け根内側にみる摩耗の跡や漆の状態を、堅いものが繰り返して生じたものと考えられるならば、本品に蓋が添っていたものと推定される¹²⁾。

二、年紀銘について

本品は、その来歴の手掛かりとなるような、保存箱の類や附属品は伝わっておらず、この菜桶が「法華寺」から流出した経緯を知る術はない。はじめに述べた通り、「法華寺」「徳治二年」銘を

有する類品は三件確認されている。うち一件は文化庁蔵《根来塗菜桶》(重要文化財)であり、ほかに細見美術館蔵と既出の個人蔵《菜桶》がある。河田氏はその論著の中でこれら菜桶を年表にとりあげ「菜桶他に二口あり諸家分蔵」と指摘される。ほかに銘文をもつ作例は僅かに存在しており、年紀銘や伝承等が明確で、先行研究で比較的良好に論じられてきた菜桶をあわせて一覧化すると、次表の通り五指に余る。No.1・2は上下二段にめぐらせた箍を胴に締着させ、箍の間と提げ手を黒漆塗とする。見込みは朱漆とする。No.3はおそらく後補の漆塗のために、朱漆が看取されないが、提げ手の刳り込み、花形はNo.1・2・3それぞれ近似する。奈良・東大寺に伝

表 菜桶一覽

No.	指定	所蔵	時代	銘記	法量(径×高cm)
1	重要文化財	文化庁	徳治二年(一三〇七)	底裏朱漆先銘「菜桶廿四口之内/□華寺常住/徳治二年七月日」 底裏朱漆後銘「天文三年 ^{前四} 甲/□提寺□□□□修方/三月十六日」	三三・四×二四・五
2	重要美術品	京都・細見美術館	同右	底裏朱漆銘「菜桶廿四口之内/徳治二年七月日」	三三・三×二五・五
3			同右	底裏朱漆銘「菜桶廿四口之内/法華寺常住/徳治二年七月日」	三三・二×二四・〇
4			同右	底裏朱漆銘「菜桶廿四□□□/法華寺常住/徳治二年□□□」	三三・二×二五・七
5		奈良・東大寺	応永二年(一三九五)	底裏朱漆銘「故物云/應永二 ^亥 乙七月日新調之/破損之間令再興早/東大寺/戒壇院 九之内/慶安四 ^卯 辛十月吉日」 月吉日/年預浄慶/塗師久作」 胴朱漆銘「戒壇院/十之内」	三三・三×二五・四
6		同右	同右	底裏朱漆銘「故物云/應永二 ^亥 乙七月日新調之/破損之間令再興早/戒壇院 九之内/慶安四 ^卯 辛十月吉日/奉行浄慶/塗師久作」 胴朱漆銘「戒壇院/十之内」	三四・二×二五・三
7		同右	同右	底裏朱漆銘「故物云/應永二 ^亥 乙七月日新調之/堆然破損之間令再興早/東大寺□□院 九之内/(慶安四 ^卯 辛十月吉日)/奉行浄慶/塗師久作」	三三・八×二四・六

※河田貞「作品目録」(前掲註2「根来」一九八五)、「朱漆根来中世に咲いた華」(同註図録二〇一三)、川畑憲子「漆塗菜桶」(同註「國華」二〇一四)を参考に、今回新紹介の菜桶(本表No.4)を含めて作成。

来した応永二年銘の菜桶 (No. 5) は二口あり、胴側面の「戒壇院ノ十之内」から所在が知られる。荒川氏によると、No. 5 とほぼ同銘の No. 6 にみる応永二年新調の桶を慶安四年に修理した旨を示す銘文中に「九之内」とあることから、再興したときには十口のうち一口が既に欠けていたとみられる。加えて、河田氏によると No. 5 は提げ手の付け根部分、割り込みの形状に若干の相違があるが同じく応永二年銘をもつ菜桶 (No. 6) と軌を一にしており、同時の作といわれる。また氏によれば、No. 6 のほか No. 7 も東大寺蔵の菜桶 (No. 5) とまったく同銘のもの (ただし年預でなく奉行浄慶) で、他家に分蔵されているという。塗りや提げ手の割り込み、銘の書き振り、そして法量が概ね一致しているため、同時の作と判断されたのだろう。管見の限り、漆工品は一揃いであっても一つずつ表情が異なり、細部の作り込みに若干の差異が認められるから判断は妥当といえる。

ここでは、題に掲げた菜桶の年紀銘について考察することを目的としており、現在確認されている複数の作例について概観しただけに過ぎない。ただ所在や時代を異にしながら、各菜桶の器形や技法は徳治二年銘のものを概ね踏襲していると捉えられる。実際、法華寺の菜桶に做ったという謂れはないが、寺院の什器に一定の規格のあったことが推して知られる。寺院での唐物需要と、そこからの唐様式、折衷様式、和様式というおおよそ三つの分類を念頭に置いて、時代の傾向や器物の流行を考えることも必要であろう。

改めて法華寺・徳治二年銘をもつ本品 (No. 4) と No. 1・2・3 の菜桶をみてみよう。寺院銘のない No. 2 は、東大寺に伝来したという。この説明に従うならば、法華寺の所在がわかる菜桶は、本品と

No. 1・3 である。ここで注目すべきはその銘文で、本品の底裏朱漆銘は漆の剥落にともない、完全に読み取ることはできない。No. 1・3 の銘文の存在から「菜桶廿四口之内」法華寺常住ノ徳治二年七月日」と想像されるが、朱漆銘の断片をみる限り、文字の繋がり不明であり、同月の作と判断するのは現時点では難しい。銘文からは少なくとも各菜桶が徳治二年の段階で法華寺の什器であったことがわかる。法華寺の由緒や事歴については先学諸氏の研究により、総国分寺である東大寺に対して、総国分尼寺として役割を果たしてきた歴史が知られ、叡尊 (一二〇一〜九〇) の戒律復興にともない中興したこと等は『法華寺縁起類』はじめ歴史資料に記録されることから、鎌倉時代後期よりしばらくの間、真言律宗の門跡寺院としてあった同寺で菜桶として供されたことがうかがえる。ただし、No. 1 菜桶は「招提寺」「天文三年」の後銘があるから、はじめ No. 3・4 とともに法華寺で供されたのち、律宗総本山の唐招提寺へ移ったのだろうか。

限られた所見に過ぎないが、これまで分蔵といわれてきた菜桶を結びつける考察が極めて少なかった状況から、前進することができたと考える。鎌倉時代に寺院で供された什器の一つの姿を示しているものであり、朱漆器を分類比較して根来塗の諸相を探るうえで、本品の存在は極めて重要になる。今後は本品の来歴を叡尊教団の社会活動や南都律宗寺院の動向をも考慮して慎重に検討する必要がある。

おわりに

明治四十一年、国内で初めて根来をテーマとする展覧会が奈良帝室博物館で開催された。今から百十五年前のことである。爾来、国

内外で根来の展示が催された経緯がある。まず根来と称するものの、その姿の美しさや余計な装飾を極力削ぎ落した荘重なたたずまいは人々を魅了し、人気を博してきた。根来の瓶子や折敷等は茶事で客人の目を楽しませてでもいる。ところがいざ「根来塗とは何か？」を考えると、古い朱漆器全般は根来塗、根来という名で一括りにされて、独り歩きしてきたように思う。根来塗の間口は広く、代表例を見つけることは難しいという印象を抱いた。近年、各地で出土漆器が報告されるようになるまで、漆器の生産・流通の背景にある寺院または個人の動向まではさほど触れられてこなかったというのが実情であろう。本稿は目覚ましい成果を得るには至らなかったが、以前よりも銘文や所在先に踏み込んで考察することができたと思う。堅牢で重厚な作りが特色の一つといわれる根来塗。この重さも調査項目の一つとして注目される。今後は、重量計測をも含めた記録・比較分類をとることも必至であろう。全国各地にはまだ根来塗または根来と称する朱漆器が眠っているはずで、それらを探索・調査していき、さらに詳細な研究報告を行いたい。

注

- 1 大阪市立美術館コレクション展「堆朱・鎌倉彫・根来」(二〇一五)では《根来 菜桶》(鎌倉時代 法華寺 徳治二年銘)と《根来 菜桶》(室町時代 十五世紀)等が出品され、土井久美子前担当学芸員が解説されている。根来の情報は、岡田謙「根来塗について」(『三彩』九七 造形芸術研究所出版部 一九五八)、荒川浩和「紀年銘根来塗について」(『MUSEUM』九二 東京国立博物館 一九五八)、吉野富雄「根来器所感」・溝口三郎「根来塗について」(『根来』熱海美術館 一九六六)、河田貞『根来塗』日本の美術二二〇(至文堂 一九七六)、河田貞『根来』

(紫紅社 一九八五)、『根来寺坊院跡』(和歌山県教育委員会、和歌山県文化財センター 一九九四)、北野信彦『近世出土漆器の研究』(吉川弘文館 二〇〇五)、小松大秀「朱漆器と『根来塗』」(『國華』一四二) 國華編集委員会 二〇一四)、『朱漆 根来 中世に咲いた華』【図録】M I H O MUSEUM 二〇一三)を主参考とした。

3 根来寺は、新義真言宗の総本山。十二世紀前半、覚鑿上人(一〇九五～一一四三)が鳥羽上皇の庇護のもと、はじめ高野山上に開創したのち、十三世紀後半、当時学頭であった頼瑜僧正が拠点根来に設けた。中世根来寺の境内の様子を示す資料として「根来寺伽藍古絵図」(和歌山県指定文化財 江戸中期 根来寺蔵)がある。ここには、軒を連ねる院家が描かれており、多くの学僧を抱えて隆盛をみせた一大寺院の様子をうかがい知ることができる。ほかにルイス・フロイス『日本史』に根来寺の記載があり、寺の繁栄や根来衆の生活について言及している。勢力を誇った根来寺であったが秀吉に警戒され、天正十三年(一五八五)紀州攻めに遭うと、大塔(昭和二十七年国宝指定)、大伝法堂、大師堂(昭和十六年重要文化財指定)、大門等を残して寺は焼失した。そのうち大伝法堂と大門とは秀吉勢に破却、運び去られる等したため、広い山内に残った建物は大塔と大師堂の二棟のみであったという。根来寺の再興は江戸時代・慶長年間以降のことである。

4 「根来塗」の文献上の初出は、黒川真頼『工芸志料』(明治十一年)。各地の漆器を報告する中で根来寺の漆器を根来塗と記録する。昭和期に入ると根来塗を評価、収集する活動が流行し、現在の根来塗のイメージが形成されていったとみられる。

5 盟は二対四口あり、各底裏に朱漆銘「細工根来寺重宗／六蔵寺二對内／本願法印惠範」とみえる(前掲註2 図録 参考作品3 参照)。中世、六地藏寺を六蔵寺とも呼んでいたという(前掲註2 河田一九七六参照)。

6 縄文時代には漆を加工する文化の存在していたことが、北海道・垣ノ島B遺跡をはじめ、福井・鳥浜貝塚、青森・三内丸山遺跡等各地の出土品から認められる。このうち垣ノ島B遺跡の漆製品は約九千年前に遡る世界最古のもので、漆に赤色顔料の一種ベンガラ(赤色酸化鉄)を用いたことが報告されている(『南茅部町埋蔵文化財調査団報告書十・垣ノ島B遺跡』南茅部町埋蔵文化財調査団 二〇〇二)。古代以降も漆は利用され続けるが、中近世にかけて漆製品が一般に広がっていたことが、絵画資料や文献のほか、近年の発掘調査から明らかになってきている。

- 7 少なくとも江戸時代には根来寺、根来と朱漆器とを関連付けていたことが当時の資料から読み取れる。正保元年に刊行された『毛吹草』によると、紀伊国の産物として「根来 椀 折敷」とあり「昔寺繁昌之時拵タル道具ト云当時方々ニテ売買之」と紹介されている。かつて根来寺で産した朱漆器が、江戸初期の段階で作られていなかったにもかかわらず、名の通っていた様子がうかがえる。江戸中期には『和漢三才図会』の中で、椀の代表的生産地として根来がとりあげられている。ほかに親の代の「根来物」に劣らないくらい、布で補強して上等な下地を塗った漆器（『御伽名題紙衣』）とある。後期には『紀伊国名所図会』が根来椀に触れ、かつて根来寺や周辺の村で朱塗の椀や折敷を製作していたと記す。江戸時代を通じて、根来寺の漆器を評価していたこと、特に椀や折敷を根来寺と結び付けていたこと、そして頑丈で上等な朱漆器をさすとき根来を基準に語っていることが、これらの記述から確認できる。根来寺消滅後も、その遺品が諸所に伝わったと予想されるが、六地藏寺の遺品が現存唯一の「根来塗」であって、その全容は判然としないことが多い。
- 8 「菜桶」の項（前掲註2図録）、「菜桶」の項（『朱漆 根来 その用と美』【図録】堺市博物館一九八六）参考。
- 9 西谷功「泉涌寺における唐物の受容」（『唐物とは何か』勉誠出版二〇二二）（2）給仕用の漆器、食後の喫茶」において文化庁蔵の菜桶と五百羅漢図に描かれた桶とを比較して言及されている。大徳寺本「飯僧」の図様とほぼ同一のもので、円覚寺本・東福寺本の食事場面の画幅にも、片手に桶を提げた待童の姿が確認されている（米沢玲「大徳寺伝来五百羅漢図について」（『仏教芸術』創刊号 中央公論美術出版二〇一八）。
- 10 東大寺戒壇院に伝来した菜桶。蓋は黒漆に朱塗縁とし、中央に菊座を据えて、黒塗りの切子形つまみを取りつける（前掲註2河田一九七六 第13図 菜桶）。
- 11 「菜桶」の項（前掲註8図録）参照
- 12 ここでは什物の姿を厳密に写したか触れないが、「五百羅漢図」を参考にすれば桶の提げ手は縦に間延びした印象を受ける。本品の提げ手もまた胴部の立ち上がり比して若干長い。仮に胴と提げ手の中間に蓋をもうけることで、長い提げ手の印象が薄れ、より整った姿になりはしまいか。直ちに、持ち手の長さや蓋の有無とを結び付けるだけの根拠を持ちえないが、用即美という観点から、もののバランスやプロポーションの問題は無視できないはずで、根来塗の器形を探る課題の一つとしたい。

- 13 前掲註2河田一九七六参照
- 14 前掲註2荒川一九五八・河田一九七六 第91図 菜桶
- 15 溝口三郎氏が試みた「根来塗の三様式」で、今日の根来塗の器物分類に役立てられている。（前掲註2溝口一九六六）
- 16 作品解説「第12図 菜桶」に「（前略）東大寺伝来。底裏に『菜桶廿四口之内 徳治二年七月日』の朱漆銘を残している。」とある（前掲註2河田一九七六）。のちに河田氏は徳治二年銘の菜桶三口（本表No.1〜3）を法華寺伝来一具二十四口のうちのもの、とも論じている（前掲註2『根来』一九八五）。川畑憲子氏はその論著で「徳治二年銘をもつ法華寺伝来の菜桶は、（中略）ここで取り上げるもののほかに二口」が知られ「伝存する三口の菜桶は、ほぼ同様のつくり」であると指摘される（『漆塗菜桶』前掲註2『國華』二〇一四）。本稿では結論をみないが、今一度各菜桶の来歴を精査する必要がある。
- 17 徳治二年法華寺に何か特別の催しがあったという（前掲註2吉野一九六六）。
- 18 「根来漆器」展と題した同展では遺品二二七点が展示されたという（『根来漆器 特別陳列』奈良帝室博物館一九〇八）。

謝辞

本稿の執筆にあたり、ご所蔵者様より画像掲載の許可を賜りました。この場を借りて御礼申し上げます。ご所蔵者様には平素より美術館活動にご理解、ご協力を賜りまして、ここに深く感謝の意を表します。

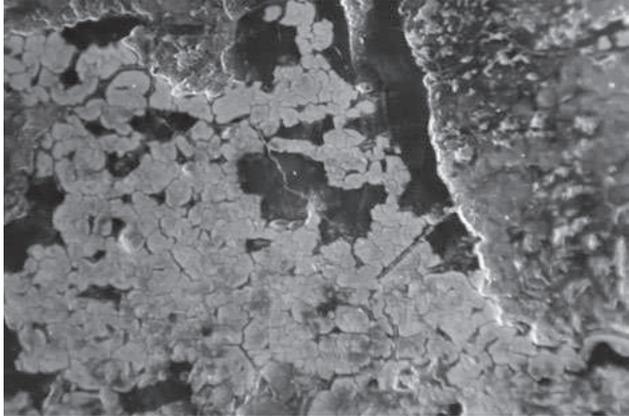


图2 同断文 (部分)

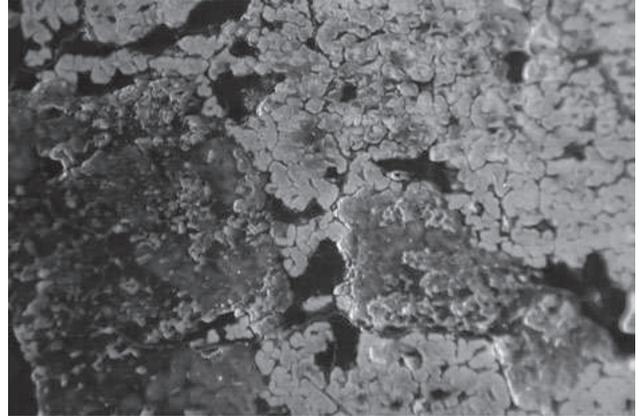


图1 《菜桶》断文 (部分) 个人藏

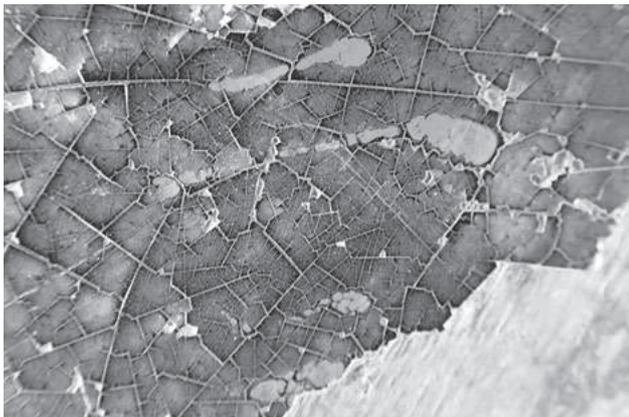


图4 同底裏断文 (朱漆銘「二」部分)

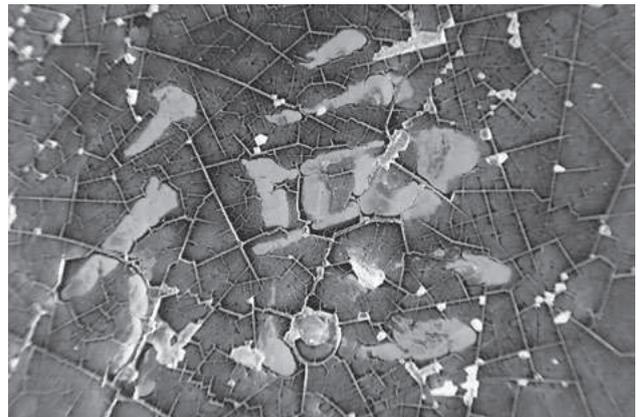


图3 同底裏断文 (朱漆銘「德」部分)

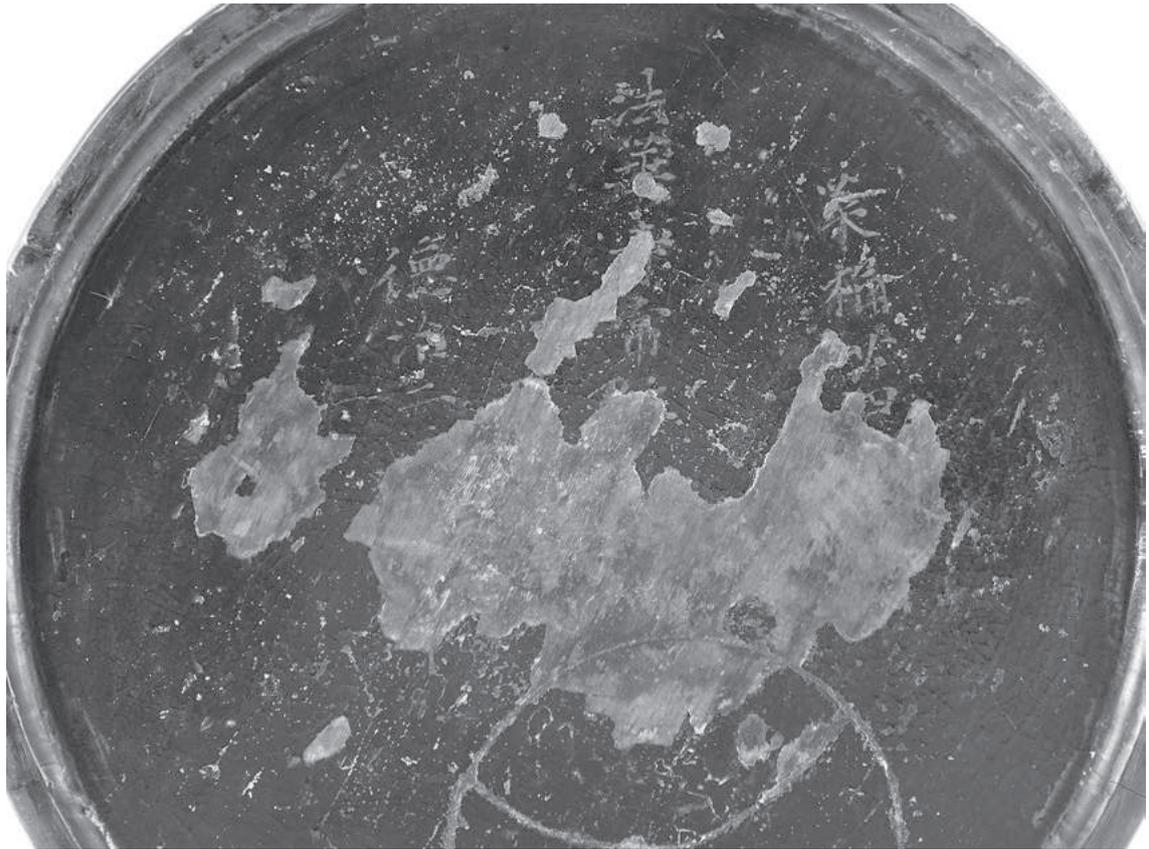


図5 同底裏（朱漆銘部分） 底板は木目がまっすぐ通っているように看取される

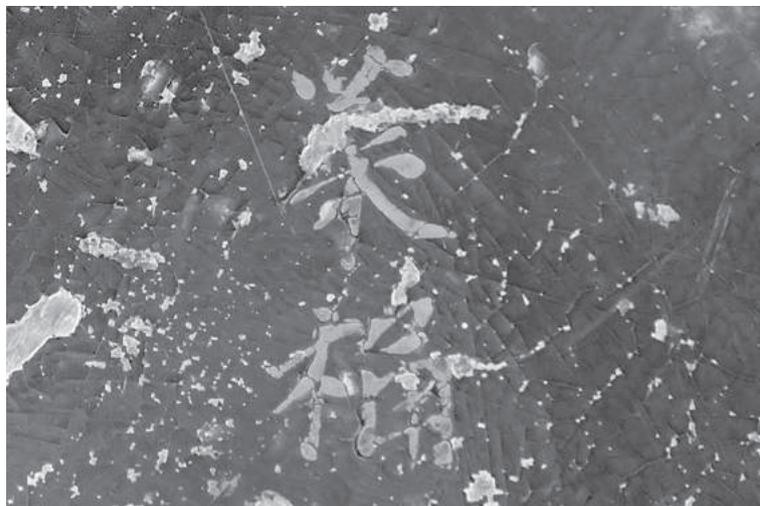


図6 同底裏（朱漆銘「菜桶」部分）



図7 同提げ手（上端部分）